

日本語エッセイ部門 最優秀賞

韓国で受けた感動

高橋 昌子*

私は、過去朝鮮半島から強制連行されてきた人々の労働の歴史を刻む炭鉱の町に生まれました。小さい頃から「あそこの家はうちら日本人と違うけえ」というような声を押し殺した会話への違和感を持ち続け、大きくなったら自分たちで日韓の新しい共生の道を探りたいと願ってきました。

何度目かの韓国訪問で、在日経験のあるヤンさんのお宅に三週間ホームステイをさせて頂く経験を得ました。ヤンさん一家は、なるべく私に日本語で話そうとし、私は逆になるべく韓国語で話そうと努力しました。ヤンさん一家の使う日本語には、私も知らないような難しい言い回しが混じっていたし、私の話す韓国語は小さい子どもの甘えたおしゃべりのように聴こえるらしく、互いの言葉にしょっちゅう笑い転げました。

そして、すっかり打ち解けて迎えた別れの日。ヤンさんの奥さんが「何かやり残したことはないですか？」とおっしゃったので、私は「사실은 한복을 입고 싶어요.」と率直に答えました。するとヤンさんの奥さんは、パアツと花が咲くように微笑み、部屋を出て行きました。そして、鮮やかな赤と緑のコントラストがまぶしいハンボックをふわりと胸に抱いて戻ってきました。

「まさこ、これを着なさい」

はずんだ声と満面の笑顔で大事そうにハンボックを広げ、その袖を私の腕に通させようとする奥さんに、私ははにかんだ表情で従いながら内心（ホントはお店で自分の好きな衣装を選びたかったんだけどな）とっていました。

「まあ、なんてきれいなこと！」

ヤンさんの奥さんは満足そうに頷き、一言ずつ噛み締めるように語り始めました。

「このハンボックはおかあさんからいただいたもの。おかあさんが結婚式で着たものを私も着ました。だから、私たちカジョックの幸福のしるし」

流暢な日本語に混じって聞こえた「カジョック」という言葉。家族でなくカジョック？

ハッとしました。奥さんにこのハンボックを譲ったヤンさんのお母さんは過去に日本でどんなにか苦労をされたに違いない。その苦労の中で守り育てた家族の愛情の歴史がこのハンボックを通して手渡されたのだ。その歴史を今またこうして私に繋げようとしてくださっているのではないのか。日本語の「家族」には置き換えられないヤンさん一家にとっての「カジョック」という韓国語が胸に響きました。

私は「감사합니다」というべきか「ありがとう」というべきか一瞬迷いました。

その時ヤンさんが私を見つめていました。

「まさこ、日本に帰っても忘れないで。私たちはあなたの『家族』。そしてあなたは私たちの『カジョック』」

互いを思いやり、互いの国の言葉や習慣を理解していくと同時に、異なりの重ね合いの中で深くゆるやかな共生をめざしていくことも大事なのだと思い至りました。

この貴重な経験に感謝しながら、心をこめてヤンさん一家に伝えたい。

「ありがとうございました。あなた方は、私の大事な家族です」

韓国で受けた感動

伊藤 広美*

泣きわめく子供の声が響いた。まさに、隣にいるわが子。そこは昼時の混雑したレストランだ。目の前には初対面の韓国女性二人。突き刺さる他のお客さんの視線。

本当に、参った。なぜ泣くのか。旅の緊張か疲れか。なだめてもすかしても余計わめくばかり。ただただ、謝り、冷や汗をかき、子供を半ば羽交い絞めにして店の外に連れ出す。

楽しい食事の場のはずだった。とにかく申し訳なく、恥ずかしく、子供を連れ韓国に来ること自体が間違っていたのかと打ちのめされた。そんな、なんとも言いようのない気持ち、苦い思いで、泣き止んだ子どもを抱き席に戻った時だった。忙しそうに動いていた店員の初老の女性が近づいてきた。昼時の店内で騒いでしまったことを叱られるのだろう。身構えた私。隣にいる娘の前で女性は言った。

「泣いたらダメよ、お母さん困ってるわよ」

そして、お菓子を一袋差し出したのだ。正直驚いた。日本人の親子が、混雑した店内で騒ぎたて、迷惑を掛けた。それなのに……。

「子供を連れて、韓国に行く。」そう決めた時、私の中には警戒心があったのだと思う。一人の時の様に気楽には動けない。子供のことは私が全て責任を持たなければ。気負っていたのかもしれない。そんな私の気持ちを察するような言葉に、涙が出そうになった。

韓国との付き合いは約十年。気軽な気持ちで始めた韓国語の勉強を機に、当時からずっと親しくしている友達もいる。もちろん、嫌なことがなかったわけではない。日韓問題が起き、「よくこんな時に連絡できるよね」と言った知り合いもいた。でもまた、大震災の時、「何か要るものは？」と EMS ですぐにカップ麺等をたっぴり詰めて送ってくれた、そんな友達がいることも事実だ。

帰国の日には雨だった。うっかり傘を準備するのを忘れていた私。子供達と途方に暮れていたホテルの出口で、すれ違った女性が思いも寄らない言葉を掛けて来た。

「この傘、持って行って」

帰国するのでもう戻らない、と伝えても、「いいのよ、持って行って」と。

スーツケースと二人の子供を抱え、バスに乗ろうとした時、隣にいた方がさっと子供を抱き上げて、バスに乗せてくれた。もう、何も言えなかった。警戒していた自分を恥じた。日本人はこうやって自然に手を差し伸べられるだろうか。ましてや言葉が通じないかもしれない外国人。子供が泣きわめけば冷たい視線を投げかけ、荷物が大きければ邪魔だという雰囲気醸し出す。

「捨てないで。」その時の傘は、娘のこの言葉通り大切に置いてある。幼い娘にも、親切にして頂いた温かい心が、旅の思い出と共に伝わっているのだろう。国と国との間には難しい問題が横たわろうとも、人と人との間には、こんなにも温かい気持ちが流れているのだという事に、感動を覚えた瞬間だった。

私達親子は、また韓国旅行を計画中だ。

未来の約束

高橋 良昌*

私の住む山口という土地には、戦時中の強制連行をはじめ長い歴史の中で日韓のきしみが色濃く残っている。

差別的な発言や、日常的な喧嘩も絶え間なくある。私は生まれが栃木県で、そうした背景をほとんどもたない土地柄だったので、山口に来た当初は「へえ、そんなもんか」と驚いた。それが、10年20年と経つうちにいつのまにか私にも韓国人に対する偏見というか警戒心みたいなものが育っていたようだ。そのことをまざまざと思い知らされたのは、娘が韓国人と付き合っていると知った時だ。どんな青年かも確かめず「だめだだめだ、それだけはならん」と頑なに拒んだ。「お父さんがそんなことを言うとは思わなかった」と娘が涙ぐんでも「韓国人はだめだ」を繰り返していた。

折も折、仕事の関係でソウルに出向くことになった。ついでにと案内された天安の「独立記念館」を見学して愕然とした。韓国の歴史の中で日本がどれほど憎しみの対象となっているのかを思い知らされた。娘と付き合う相手が韓国人などやはりあり得ない。

ところが私がソウルに来ていると知って、その絶対あり得ない娘の彼氏が私を訪ねてきた。逃げる訳にもいかない。仕方ない。会うのはホテルのロビーでほんの数分だけだ。会うなり「いったい娘のどこが気に入ったのだ」とぶっきらぼうに問うた。すると青年はまっすぐ私を見て「昭和の女性のようなやさしさと真の強さです」と言った。昭和の女性だ？昭和の女性がどんなものか、なんでおまえにわかるんだ。それに昭和の日本人はおまえたちの憎むべき対象だろうが、ともう少し柔らかい言い方ではあったが問い詰めた。すると、彼はやはり私をまっすぐ見て「日本人の精神文化をこよなく愛しています。憎むべきは昭和という時代の日本人でなく、どんな善良なる人間をも狂気に駆り立てる戦争を起こしてしまった昭和という時代です。」と静かに言った。「今の私たちは、平和な時代にあって親和的韓日関係を築くことだけに満足せず、ひとたび戦争になれば普通の人間がたやすく非人間化するということを自分の問題として見据え続けなければいけないと思っています。お嬢さんはその大切なパートナーです」。私は心の底から自分を恥じた。自由の時代を生きる若者が、敢えて不自由な時代に通じる人間の本質的な弱さ・脆さを感じ取ろうとしてくれている。「昭和の女性」という言葉は、単なるイメージの中から出てきた贅辞ではなかったようだ。

数分と思ったロビーでの出会いは、結局1時間近くになった。

若い二人の将来がどうなるのかは、わからない。しかし、彼らがそれぞれの価値観や学びをぶつけあいながら重ねていく時間はきっと、日韓の過去に対しても未来に対してもかけがえのないものとなるであろう。

今彼は日本の大学院で日韓の比較政治について勉強しているらしい。なんだか難しそうな学問でよくはわからないが、来月にはまた酒を飲みかわす約束をしている。

自分の国を愛する心

韓 世元*

私は日本で生まれ育った韓国人です。日本に住んでいる中で、日本のことが好きになっていきました。周囲の人に韓国人が多く、文化や韓国語に触れる機会が多く、多少の文化や韓国語は知っていました。それにもかかわらず、私は韓国語や文化には関心がありませんでした。以前、学校にいた韓国人の先生は、私達にいつも自分の国を愛する心を持つと言われました。私は、何がそんなに重要か分かりませんでした。分からないまま高校生になり、日本の友達と、日韓に関するニュースを見ていました。突然、友達は僕に韓国人としての意見を聞いてきました。

韓国人の立場で普段考えていなかったのが、分からないと言いました。たとえ日本で生まれ、日本の文化を肌で感じて育っても、いくら日本語を流暢に喋れたとしても、日本の友達は私を韓国人として見ると強く感じました。このことをきっかけに、自分の国に誇りを持つと考える、まず自分の苦手だった母国語の勉強を一生懸命しました。それから韓国のドラマや音楽を通して韓国の文化に少しずつ接していきました。このように、韓国の文化や語学に接していく中で、韓国の事を誇らしく思えるようになりました。今に至ってやっと自分の国への愛国心の重要性が分かってきた気がします。自分の国を愛する事で自尊心を持つようになりました。それから他の文化や言葉や人を深く理解できるのだと思いました。昔は相手をどこの国の人かで差別をして、非難することで自分が持っていない愛国心をごまかしていました。自分がない愛国心を持っている人を非難することで、愛国心のない自分を正当化していたのです。自分の国を愛するようになってからは、他の文化や言葉や人を尊重しなくてはと感じるようになりました。自分の国を愛する事は他の人や文化を深く理解するための大事な一歩だと思いました。

キムチは誰のもの？

福田 康世*

早春の全羅南道を一人旅していて、夜たどり着いた海辺の町での出来事だ。小さな食堂のドアを開けて中をのぞくと、おばあさんが片づけものの手を止め、手招きしてくれた。遅い時間に入店したことを詫び、日本から一人で来たと話すと、おばあさんは目を丸くして驚き、早速てきぱきと食事の支度にとりかかってくれた。

食卓にキムチやおかずが並べられ、メインの焼魚が運ばれてきた。腹ペコの私が夢中でほおぼっていると、おばあさんがタコのお粥を持って私のテーブルに来て、目の前に座って食べ始めた。まともに向き合う形に少々戸惑ったが、話し相手がいるのはありがたい。「今から夕飯ですか？」と何気ないおしゃべりをしながら食べていた。するとおばあさんはお箸を伸ばして私の定食のキムチを食べた！！

「え??それ、私の…」

もちろん言わなかったが、正直かなりびっくりした。

韓国の食堂では必ずキムチや合え物などのおかずが何種類も出される。代金に含まれる料理の一部と考えるべきなのか、あくまでもお店のサービスなのか、よくわからない。食卓の脚が折れるほど料理を並べてもてなすという言葉があるそうだが、残さず食べなさいと躰けられて育った日本人としては、料理を残すことに大変な罪悪感を抱く。特に一人旅では毎回食べきれず心が痛むので、ついさっきもおかずは少なめでいいですから、と言ったばかりだ。ならばキムチは私が注文した料理の一部分では？でもテーブルにキムチ壺が置かれ、客が好きなだけ取り出す所もあるから、お店のものなのか…？

曖昧さを好む日本人だが、こと食事に関しては自他の区別を明確にする場合が多い。よほど仲良くなならないと自分の箸で料理をシェアしないし、時には一円単位まで計算する割り勘も平等の形をした自他の線引きといえるだろう。一方、韓国になぜ割り勘がないのかを尋ねると、誘った人がおごる、と答えは単純明快。この考えでいくと、キムチどころかそもそも料理が誰のものか？なんていう発想すらないのかもしれない。

そんなことを考えていると、おばあさんが「そうそう、あれもあったわ…」とつぶやいて席を立ち、チゲを出してくれた。残り物だけけどおいしいから食べてみて、と。そのチゲは海藻がすっかりふやけ、まさに我が家で夜片づける朝の味噌汁と同じ味がして、なんだかホッとした。肩の力が抜け、親戚の家にでもいるような暖かい錯覚に包まれた。そうか！韓国で食事とは、同じ空間に集った人が共に分かち合うこと、なのだ。ふらりとやってきた外国人さえも独りぼちにしなないその心遣いは、食堂の主ではなく、オンマの優しさそのものだった。もうキムチが誰のものかなんてどうでもよく、私は他のおかずも勧めながら、食事を共にしてくれたことに感謝した。心地よい時間と空間をゆっくりゆっくり味わった。

日本語エッセイ部門 佳作

私が考える韓日交流

横山 宏*

30年前の夏、釜山港。

「ここから中国、シルクロードを通過してヨーロッパ、アフリカまで歩いて行ける」、そんな世界地図を頭に描きながら、初めての韓国、初めての海外への第一歩を踏み出した。

決めていたのは、行き先を決めない、ということ。

やって来たバスや列車にふらりと乗り、気ままに旅した一週間。

狭い路地の奥、どこまでも続く露店と人々の活気に圧倒された釜山。

長い時の流れが、街のあちこちに凝縮されていた慶州。

巨大コンビナートに囲まれ、溶けた鉄のような熱気にあふれていた浦項。

ビルが林立する中、そこだけ時間が止まっていた景福宮。

そして、そこで出会った人々。

路線バスの中で地図を広げる私に、どこから来たのか、どこに行くのか、あそこがいい、これを食べるとあれこれ世話を焼いてくれた乗客たち。

ビビンバのおいしい店を聞いたら、言葉が伝わらないもどかしさから、パトカーで送ってくれた警官。

ひとりベンチに座っていた私に日本語で話しかけてきて、自宅に泊めてくれた老人。

雪岳山の山小屋で、過去のこと、今のこと、未来のことを、夜を徹して語り合った二人組の学生。

フェリーの中で抱いていた不安は、様々な出会いを重ねるうちに、好奇心へと変化し、旅の終わりには、韓国人から道を聞かれるほどすっかり韓国になじんだ自分がいた。

今、日本と韓国との間には、冷たい風が吹いている。

政治や経済、歴史認識などでの対立を背景に、日本人の66%が「韓国に親しみを感じない」（内閣府調査）と答え、韓国人も74%が「日本に親しみを感じない」（韓国ギャラップ社調査）と答えている。

今年1月に韓国を訪れた日本人は、前年比19%減の14万人と、98年の水準まで落ち込み、あれほどにぎわった梨泰院や南大門から、日本人の姿が消えているという。

円安の影響もあるのだろうが、こうして日本人、特に若い人たちが韓国を訪れる機会がどんどん少なくなっていることをとても残念に思う。

それにしても、7割が相手に親しみを感じないというのに、ネット上には「韓国人、日本人」の論議がいつまでも続いているのはなぜなのか。裏返せば、それだけ互いの存在が気になって仕方ないのだろうし、無関心であるよりは、よっぽどいいことなのだと思う。

韓国は、すぐそこにある、近くて、近い国。

「日韓関係！」などと身構えず、隣町までちょっと、という感じで出かけてみよう。

ネットやメディアからの情報ではなく、人々とのふれあいの中から、いろいろな違いを自身の感性で見つけよう。

日本人と韓国人、歴史風土や文化が異なり、ものの見方や考え方が違うのは当たり前。

そうした違いをありのままに受け止め、好奇心を持つことでこそ、相手をもっと知ることができるのだから。

そして、好奇心にまかせて韓国のまちを歩き続け、疲れてベンチに座り込んだあなたを、韓国の人々は、きっと温かく受け入れてくれるはず。

30年前の私の時と同じように。

韓国の「お・も・て・な・し」

森本 紀正*

韓国には韓国の「お・も・て・な・し」

日本は今、2020年東京五輪に向けて「おもてなし」ブーム。

最近は欧米でも、日本の「おもてなし」が話題になることもあるらしい。

しかし「もてなし」の文化などこの国にもあるし、あたりまえだが韓国には韓国の「もてなし」がある。ただ日本と韓国では「もてなし」の仕方がまるで違うのが面白い。

日本の場合はやや内向的で形式をこだわる傾向が強いので、やはり「お」をつけて「おもてなし」と言うのが妥当かも知れないが、韓国の場合のはかしまった形式など無用の、普段着の「もてなし」である。ダイナミックで開放的で、もてなされる方も余計な気をつかわずにお腹も心も満腹になるまで楽しめる。

例えば全州での出来事。

地図を広げて夕食をとっていると、向かいのテーブルのおじさんが声をかけてきた。

「日本人か？」「全州には何をしに来た？」

統営でも鎮海でも羅州でも、どこでも聞かれるこのおきまりの質問は、単なる会話のきっかけである。そして大体の場合、この質問を合図に楽しい夜の幕が開く。

全州おじさんにいくつかの事を尋ねたら、「自分はよく知らない」と言って携帯電話で友人を呼び出してくれた。韓国人はやる事が早い。口と指が同時に動き電波が飛んで友人がすぐに顔をだす。ドアの向こうで電話を待っていたんじゃないかと思うほどに速い。新加入の2人の全州おじさんにいくつかの事を尋ねて用件は10分で終了。早速マッコリの薬缶が次々と追加され、私達のテーブルはおかしな韓国語を話す日本人を囲んで大盛り上がり。酔っぱらってしまえばこっちのものだ。知っている言葉はぜんぶ使ってやる！とばかりに下手な韓国語でわめいては笑い、笑っては飲んで気が付けばホテルのベッド。全州おじさんたちが、前後不覚に酔っ払った日本製술고래をホテルに宅配してくれたのだ。

「でも、あの店の支払いは誰がしたんだ…？」、私でない事だけは確かだ。

私は韓国の地方ばかりを一人で歩いているが、行く先々で地元の人たちとこのような交流を体験する。決してタダ酒を期待しているわけではないが、なぜかそうになってしまう事が多い。

こんな韓国人の少々手荒いが、一瞬にして垣根を消し去るような温かい「もてなし」の根底には、「親切心」が横たわっているのではないかと私は思っている。食堂でもバス停でも地図を開いていると、「何か困っているのではないか…」と誰かが声をかけてくれる。何しろ韓国人は、困っている人を放っておけない人たちなのである。

日本のように客を迎えるための「おもてなし」ではなく、親切心の発露としての「もてなし」なら、何の形式などにこだわる必要があろうか。

だから私は、初めての土地でも何の心配も無く一人で歩く。困ったことがおきた時には、周りには必ず手をさしのべてくれる誰かがいる。

そうだ、今年は韓国の南の島々を歩こう、羅老島にも行ってみよう…

日本語エッセイ部門 佳作

私が考える韓日交流

崔 唯衣*

「韓日交流」は、良い意味でも悪い意味でも大きなことから小さなことまでたくさんあるのではないかと私は考えます。国は、国民からできているように、韓日交流にも同じことが言えると思います。韓国と日本のそれぞれの国民一人一人が交流しようという気持ちを持てば、やがて国同士の交流につながるでしょう。

私のハラボジはよく話を聞かせてくれます。たくさんあるうち、この話が私は最も印象に残っています。私たち
在日韓国人についてです。「例えば、世界を虹としたら、色々な国々を赤や黄色や青としよう。世界の国々が集まってきれいな色になるでしょう。でも、大切なのは、色と色の間のにじみ。いわゆるダブル。在日やダブルの人たち、つまり虹のにじみがないと本当にきれいな虹を見ることができないでしょう。国と国をつなげるのは私たちなんだよ」と。それを聞いて、私は自信を持つことができました。たとえひとつの国として色を持つことができなくても、色と色の間のにじみになれるのです。国同士をつなげる、虹を輝かせる力があるのです。

多分、まだ中学生の私には韓日交流のために大きなことを成し遂げるのは困難です。それでも、些細なことなら
できます。韓国の観光客に親切にしたり、友達には私の母親が作るトックスープやお味噌汁もおいしいと伝えることができます。今の韓日の問題はまだまだたくさんあるかもしれません。だからといって悪いことばかりではないし、小さなことでも良い意味の韓日交流をしなければなりません。それを続けることで、いつか韓日交流にとって大きなものになるのではないかと思います。

私は、虹にあるにじみ。虹をきれいに見せる2つの色を持っているのです。その虹の中で目立っているのは色だけ
ど、それを支え輝かせられるような存在になるために努力したいです。それが私の考える「韓日交流」。